

酒門共有墓地

水戸市酒門町330番地にある。墓地の面積2,0647㎡(6,246)坪、
現在共有者数456名 昭和30年7月23日水戸市指定史跡となる。

水戸藩士族の為に徳川光圀公が寛文6年(1666)4月に定めたもの、朱子の礼式を参考にして葬祭略儀を編纂して配り、自葬祭を勧めた。(仏式でも、神式でもなく、儒式に近い)墓碑銘も戒名も刻むことを禁じている。城東下市に住む士族を対象とし、上市の士族には常磐共有墓地を与えている。詳しくは共有墓地の葉を見て欲しい。

酒門共有墓地に眠る先賢志士の紹介

大森多膳伊譜 (鎮派)

小田原城主・大森実頼の末裔、北条早雲により藤頼の時城を追われ、武田信玄に仕え、武田氏滅亡により、
武田万千代に雇従して水戸に下る。慶長14年頼房公に多膳伊譜の時幕末を迎える。大番頭上座、800石、
明治2年水戸県に出仕、大隊長となる。

大森弥三左衛門信任 (五好の一人)

幼名金三郎 母は額田久兵衛の娘あさ、大森多膳の分家光圀公隠棲の時西山家老、天保12年家督を継ぎ元治元年12月大番頭上座、用達、800石、市川三左衛門に同意、慶応4年9月2日会津にて戦没

常陸山谷衛門 (名横綱、出羽海親方)

水戸藩士で弓の師範を努める市毛家に生まれる。
水戸中学へ入学するが、体力に優れていたのが角界入りして横綱に昇進、引退後4代目の出羽海親方となる。
アメリカでの相撲興行を行い、日本の国技の相撲を始め海外に紹介した。国技館の創設にも尽力して今日の相撲の隆盛を招く基を拓いた。(幼名 市毛 谷)

望月五郎左衛門恒隆

威、義、両公に仕えて、土木、水利、検地、等に能力を発揮して水の悪い下市地区の住民の為に、笠原を水源とする所謂笠水道を敷設した。町奉行として名声を博し分別五郎左衛門と讃えられた。

小松郡蔵正永

中山備前守の与力を勤める、水術に優れ、水府流の下町派の開祖と伝えられており、現代に伝わる泳法は無形文化財に指定されて継承されている。

菅亮之介政友

安政彰考館に入り、藤田東湖、豊田天功に師事する。維新以後は太政官史局、東京帝大に勤務し史学者として名をなした。政友の史料は現在茨城大学の図書館に菅文庫本として納められている。

原 南陽

医者として水戸家に仕え、多くの
医者を養成した。一方では茶道の達人として多くの門人を指導した。南陽の処方した痔の薬は現代でも大阪の薬剤師によって製剤されて売り出されて人気を博した。

ここに紹介した人達はほんの一部の方々であり、多数の有名な藩士がこの墓地には眠っています。現代になつてからは木内克(彫刻家)佐川一信(水戸市長)等も埋葬されています。

酒門共有基地のしおり

1. 場所 茨城県水戸市酒門町330番地
2. 創設 寛文6年(1666年)4月
3. 基地面積 基地敷地 1,9890㎡(6017坪)
宅地敷地 757㎡(229坪)
計 20,647㎡(6246坪)
4. 基地共有者の数 昭和62年12月現在 456名
5. 水戸市史跡指定について

指定年月日 昭和30年7月23日

酒門共有基地は、徳川光圀公が創設したという由緒ある史実と、水戸藩および郷土顕彰に著しい功労のあった人々が眠っていると、常磐共有基地と共に史跡に指定されました。

6. 酒門共有基地が創られた由来

徳川光圀公は寛文元年(1661年)7月父の頼房公が亡くなったので、同年の8月19日、家督を相続し、34才にして水戸第2代藩主となりました。

藩主となるや数々の施政に参画し、その威業は広く知られ、後には水戸黄門漫遊記として、戯曲化されてしまったほどの名君でありました。

光圀公の施政上重要なもの一つに、社寺改革があります。当時の水戸領内には俗悪でくだらない社寺が氾濫しており、各所に小寺が建立されておりました。これらの小寺院の僧侶は、無学破戒僧であつて、奸才に長じ、怪しげな祈禱を以つて領民を惑わし金銭や財産をしぼり取るという有様でありました。

また僧侶が神社の祭事を掌り、神社に仏像を祀ることがあつても、だれも怪しむことが無かつたという、神仏混合となつておりました。

光圀公は、早くから神道を専ら研究をなし、これらの世情を嘆き悲しみ、理想の実現と民風改善と冗費省減を考へて、社寺改革を断行したのであります。

寛文5年(1665年)常府の江戸より帰国した光圀公は、社寺法令を定めると共に、社寺奉行に北河原甚五衛門景隆と山県源七麿の2人を任命し、神社仏閣の由緒や僧侶や尼僧、神官等の素行調査を命じ、領内308ヶ所の社寺を整理し、

小規模の寺院997ヶ所を取こわし、無学破戒僧344人を送俗せしめると共に、山伏、行人にも百姓または職人、もしくは商人のいづれかに転職せしめました。

光圀公は、唯一宗源神道の精神に則り、神仏混合を分離し、僧侶が神社に奉仕することを廃し、神官をもつて之に当らせ、水戸藩領内には一郷一鎮守社の制度を推進し、一郷一社の鎮守は、急度崇敬いたし、これをたておくべしと上令いたしました。一方領内の吉田神社や静神社には、復興の令を出し、古寺名刹の復興に力をそゝぎ、名僧知識を招請して、復興援助をし、諸宗を振興し、僧風を厳肅な気風に改められました。

光圀公は、このようにして社寺改革を断行し、水戸藩家士には、葬式を僧侶の手より開放し、自由に葬ることを許し、葬祭の簡素化を計り経費の節減を指針せしむるため、文公家礼より喪祭儀略を撰び、これを編纂して家士に與えたのです。

寛文6年(1666年)4月、下市に居住する家士には酒門基所(坂戸村)を、上市に居住する家士には常磐基所(常葉村)を開設して與えられたのであります。

7. 当基地に眠る先賢志士

1. 望月五郎左衛門恒隆(町奉行、民政功労者)

初代と二代の藩主に仕へ、江戸城西総堀工事に能力を発揮し、領内の庶政に優れ、水利、検地、運輸、農民保護に至るまで広職に尽し、特に笠原水道を設置し下市住民に寄与したことは著名で、機に敏なため分別五郎左衛門と称された。

2. 打越弥八直正(彰考館総裁)

字は子中、漢齋と号し、元禄12年彰考館に入り、大日本史の編纂に貢献し彰考館総裁となつた、素爽快活、質直清廉で知られる。

3. 河合伝次修(彰考館総裁)

字は誠甫、菊泉と号し、享保元年史館の書記となり、大日本史に関する事項を記述して参献の資とする。元文5年彰考館総裁となる、少き時より刻苦勉勵し、多識の風流人である。

4. 高野文助世龍(民政功労者)

字は子隠、陸沈と号し、久慈郡太田村の人なり、寛政11年水戸藩に仕へた、勤王の志厚く民政に尽した。

5. 原玄與昌克(医学者)

字は子柔、南陽と号し、医学をもつて水戸藩に仕へ待医となる。漢南折衷派の大家で、藩内の医者で彼の門人が多数いる。

6. 小宮山次郎左衛門昌秀(彰考館編修、民政功労者)

字は子実、楓軒と号し、藤田東湖の長子なり、明和3年彰考館に入り後郡奉行となり、開墾、殖林を推し貧民育児の施政なす。

7. 吉田平太郎今世(国学者)

字は平垣、活堂と号し、天保12年弘道館助教となり、国文学の方面から水戸学に貢献した。書を善くし和歌に通ずる。

8. 今井金衛門惟典(藩政改革功労者)

字は由生、紐蘭と号し、齊昭公に仕へ寺社奉行となり、社寺改革を推進する、後彰考館に入り多くの著書を残した。

9. 戸田忠太夫忠敬(藩政功労者)

通称は銀次郎、忠太夫は藩主よりの賜名である、蓬軒と号し、齊昭公の擁立に功あり、参政となり相次いで執政となる。藤田東湖と共に齊昭公を輔翼し難関に対処す。安政2年の大地震の時東湖と共に圧死した。名声高く惜しい人材であつた。

10. 石河徳五郎幹忠(民政功労者)

字は公恕、文武道に優れ、齊昭公擁立に力をそゝぎ郡奉行となり検田均賦を実施する、後京師にて朝旨奉職に身を提する。

11. 安島帯刀信立(水戸藩執政、安政大獄殉難者)

字は思誠、弥次郎と称し、嶋与と号す、戸田忠大夫の実弟で小姓頭、後執政を勤める。朝廷より勅書を賜る時、幕府の嫌疑を受け幕府に捕られ自刃を命ぜらる。

12. 佐野竹之介光明(桜田烈士)

平左衛門と称し、禄200石を賜る、幼少より才気鋭く16才で小姓となる。砲術を究め居合の術に達する、万延元年3月桜田門外にて時の大老井伊直弼を襲ひ討つ、直後脇坂邸で自刃す。

13. 岡田兵部徳至(元治甲子役志士)

字は伯奉、安政2年家老となり東禅寺の変、元治甲子の役のとき国事に奔走、能く藩主を輔け功勞す、市川三左衛門等の兵に囲まれ、病のため自刃する。

14. 岡田新太郎徳守(元治甲子役志士)

兵部徳至の長子で書院番頭、参政、大寄合頭の要職を勤む、安政の勅書降下、齊昭公の嫌疑の際幕府と交渉に当り功をなす市川三左衛門の兵に捕らわれ水戸の獄に病にて死す。

15. 加藤彦太郎善智(画家)

雪潭と号し、300石を賜り小納戸方を勤む、松平雪山に画を学び花鳥人物を善く画く、齊昭公の命を受けて追鳥狩繪巻物18軸を画いて献上する。

16. 海保帆平芳郷(剣術家)

上州安中の生れて一刀流の名手なり、水戸藩に召抱えられ剣術を指導する、性格も立派なる人物で貢禄もあり、品格を有する人であつた。

17. 荻谷金次郎昌知(元治甲子役志士)

飯村昌節(水戸藩士)の二子で荻谷信道に養われて家督を継ぐ、元治甲子の役に松平頼徳公に従つて那珂湊で幕軍に抗戦、後筑波天狗党に組し西上す、敦賀に捕われ斬られる。

18. 渡辺清左衛門政信(剣術家)

松太郎と称す、水戸藩にて一刀流の師範なり、嘉永4年弘道館教師となる、無念流の達人小川留之介との試合は後々までの語り草となつた、その早業の神技は妙に入るといわれた。

19. 大内清左衛門利貞(蝦夷探検家)

那珂郡前浜の生れて那珂湊に商業を営む、決屋と称した、天明8年4月水戸藩に仕へ勘定奉行や小納戸奉行を勤め功勞があつた。齊昭公の宿命により自費で北海道、千島を探検し復命した。

20. 菅亮之介政友(史学者)

字は子宇、桜盧と号す、安政2年彰考館に入り文庫役となる、豊田天功、藤田東湖に師事し大成した。維新後は太政官修史局や東京大学に奉職、史学者として名をなした。

21. 常陸山谷右衛門(相撲・横綱)

水戸藩士市毛高成の長男に生れる、幼年より体力秀れ角界に入り、鍊磨奮闘、益々精進し遂に横綱の栄誉を得る。横綱梅ヶ谷と角界を二分する名声を博し、相撲協会を創し、出羽海部屋を率いて指導養成し、あまたの名力士を輩出した。

22. 平山兵介繁義(坂下門の変志士)

水戸藩平山兵藏の長子なり、諸藩を遊説して勅旨貫徹に力めた、諸國遊説中幕府の嫌疑強まり、身を狹僧に装ひ細谷忠斎と変名、同志と共に坂下門外で安藤信睦の登城を襲ひ、警固の士と戦ひ死す。

23. 岡野庄八重成(俳人、芭蕉研究家)

水戸藩士岡野莊次衛門重員の子なり、16才の時脚の病となり出仕する事が出来ず俳句の道を志した。二世湖中の師近藤助五郎から点印を譲られ、三世湖中を受け継ぎむろ湖中と称した。芭蕉の研究に一生をかけた大きな業績を残した。

24. 小松郡蔵正永(水術指南者)

初名庵之助、水戸藩小十人組から中山備前守信昌組と力を勤む、水術錬達之士なり、弘道館武術伝系によれば、下市の水術指南の始祖と伝えられている。

25. 木内 克(キノウチヨシ)(彫刻家)

明治25年水戸藩士族の家の三男として生れ、水中卒業後東京美術学校彫金科教授海野美盛の指導を受ける、彫刻家として24才から85才まで日展始め入選数知れず、彫刻界の大御所として活躍、昭和46年勲三等瑞宝章叙勲、茨城団体のモニュメント「女神像」は82才の時の作品で、笠松運動公園前にそびえ建っている。

上記以外にも水戸藩に貢献した者が埋葬されています。

酒門共有墓地先賢志士の墓案内図

